

トラック 233 : 94 歳の女性への聞き取り（レユニオンの老人介護施設）

それでは質問をどうぞ。私は教師をやっていたから質問はお手のものだよ。ある時ここにやって来た人がこう言った：『あなたがリヴィエールさんですか、私の担任の先生だった』。私は答えたよ：『やっぱり学校のことなんだね！』。

—— いったいお幾つなのか教えてください。

94 年と半年。私が生まれたのは 1918 年だから 94 歳になる。

—— ずっとレユニオンですか？

そう、私はずっとレユニオンに住んでいる。生まれたのはサラジー。

—— サラジーですか。

サラジーで生まれた。パパは私が生まれる前に死んだ。夫のパパも同様に、彼が生まれる前に死んでいる。私たちはふたりとも忘れ形見というわけ。だから私たちはお似合いだった。ここにほら、彼の写真を目の前に置いている。彼は 64 歳で亡くなった。音楽家だった息子も 64 歳で亡くなった。彼の音楽をたくさん持っている。息子は音楽家で歌手で、フランスの軽音楽を歌っていた。でも彼はレユニオンで仕事をしていたのに、レユニオンではそんなに歌わなかった。彼はフランス本土の北部に住んでいるお年寄りのために、そこまで歌いに行ったこともある。

—— あなたのご両親は本土出身ですか？

いや、私はクレオールだよ。私の高祖母は奴隷だった。彼女は雇い主との間に子供を何人か産んだ。私は息子がやっていた音楽を持っている。彼はマルセイユに行ったんだよ。そこに彼が行った時にいたのはみんな、ずっと以前からフランス植民地から来た移民だった。ところであんたは何をやっているんだい。

—— 日本から来たのですが、インド洋地域に関心があって色々なことを調べています。

それじゃ、あんたは日本で生まれたんだね。でもどうしてフランス語を話しているんだい。レユニオンにはいつ頃来たのかな。

—— 私はこの辺りのことを研究していて、インド洋地域の生活に関心を持っているわけです。特にお年寄りたちに話を伺っています。

年寄りねえ。まだ立てる年寄りはごろごろいるよ。

—— つまり、お年寄りに話を伺うということで、まず知り合いが思いついたのがあなただったわけです。あなたは自分のことをうまく説明できるし、いい人生を送ってこられたということですから、それを記録することは価値があるのです。

私の夫はコルドゥリエ高校の先生をしていて、私はセントラル小学校で教えていた。

—— 知り合いがコルドゥリエ高校でしたが。

でも、その人は夫のことを知らないだろうね。彼はだいぶ前に死んだのだから。その人は多分、私の曾孫より若いだろう。私の曾孫と言えば、そこに見える写真が一番上の子だよ。たくさん写真があるんだ。

—— 私たちはこの昔の生活について日本で発表をしようと思っています。

私はそんなこと自分では書けやしないよ。

—— いいえ、録音するのです。

それじゃ馬鹿なことを言わないようにしなくちゃ。

—— 大事なのは自然に話すということです。それを全部は覚えておけないので録音するわけです。

そうすると、録音したものを日本に持っていくわけ？

—— もちろんです。

でも、それはレユニオンに残しておいた方がいいよ。私の話はちょっとひどいかも知れないし。

—— それを日本語にして日本の大学で使うのです。

でもね、私にとって人生なんてもう終わったも同然だよ。

—— そんなことを言われるのは残念なのでお願いします。

私は歩くのが好きだった。レユニオンのことをすみずみまで知っていたよ。私の夫は歴史・地理の教師だった。だから、火山が噴火して溶岩が流れた時には彼はそこまでよく行っていた。私は後からこわごわ付いていったけどね。他に何か知りたいことはあるかい？

—— 実は、レユニオンがどう変わったのかについて少し知りたいのですが。

あんたも知っている通り、今では新しいものばかりだよ。レユニオンでは何もかも今では変わってしまった。以前は電話なんかなかった。物事をうまく運ばせるためには、あちこち走り回った。電話なんかないし。音楽を聴くためになんてね。私は古いのをまだそこに持っているよ。

—— 今では携帯電話を持っているんですね。

今じゃ携帯電話だけど、昔の電話は、(手回し) クランクを回さなければならなかった。教育も変わったね、本当に。昔は、男の子なんか眺めていたらみんなに怒られたもの。あのね、私が夫に出会った頃、彼は先生だった。高校のね。私が働き始めた頃、ポセッション [北西部の町] で働いていたのだけど、毎朝列車に乗ってトンネルを通過していた。列車で 1 時間半かかった。私はサン・ドゥニに住んでいたの、朝の 6 時半に家を出て、ちょうど 8 時にポセッションに着いていた。その頃はトンネルがあったけど、今はもうない。トンネルって知っているかい？

—— トンネルは知ってますが。

山の下を通る道のことだよ。

—— 列車の運行は多かったですか？ つまり、列車がたくさんあって本数が多かったですか？

列車、列車、えーと、線路は一本しかなかったの、列車が着いてから出るまで待っていた。

—— みんな列車に乗っていたのですか？

そう、みんな列車を使っていた。崖側の道がなかったからね。それにみんな今みたいに車を持っていなかった。休暇になるとサン＝ジルに行った。その頃はサン＝ジルじゃなくて、一面にフィラオ [マツに似たブナ目の被子植物] が生えていたよ。休暇に行くときは、祖母が私を牛車に乗せた。牛車。荷車って知っているかい？ サトウキビを工場まで運ぶ牛が牽く荷車のことだ。そこら中に、工場に運ぶサトウキビがあった。サトウキビを運ぶのに特別に使う牛がいた。それで私の祖母は荷車に私たちを乗せてサン＝ジルの方に連れて行った。麦わらの家に。サン＝ジルは今みたいじゃなかった。全然今のようではなかったよ。

—— 観光地ではなかったのですね。

全然観光地じゃなかった。でもみんなそこに行くのが好きだった。それからシラオス、山道があった。何度登ったことだろう。山腹に道が一本あってシラオスまで続いていた。金持ちたちは担ぎ屋を雇っていた。椅子のついた箱のようなもので、彼らはシラオスまで運んでくれる担ぎ屋を雇った。で、担ぎ屋が金持ちたちを運ぶというわけさ。

—— 金持ち、ですか。

そう、金持ちはね。私は夫と一緒にもちろん歩いて行くのさ。レユニオンはすみずみまで知っているよ。ピトン＝デ＝ネイジュとかね。夜は洞窟で眠った。ピトン＝デ＝ネイジュの近くには洞窟がたくさんあったから。あんたが洞窟のことを知っているかどうか私は知らないし、今でもあるかどうかもわからない。毛布を持って行って地面に寝た。それから朝早くにピトン＝デ＝ネイジュに登った。私はプレヌ＝デ＝カフルから登ったけど、人々はシラオスからピトン＝デ＝ネイジュに登っていた。本当に、その頃の生活はよかったよ。

—— あなたは幾つの時から教えていたのですか？

20歳。私は20歳で師範学校を出た。私の夫は父親がいなくて不遇だったので、勉強をして試験を全部通った。想像してごらん。彼は16歳から働き始めて、教師になるためにすべての試験を通ったんだよ。その頃は本土に行かなくてはならなかった。みんな今みたいに知識がなかったからね。とにかく、新聞で綴りの間違いなんか見つけると私は頭にきた。テレビでもよく綴りの間違いを見つけた。本当に情けない。今じゃそんなことまったくくないけどね。

—— 余り書きませんからね。

まったくその通り、綴りの間違いをよくする。それから私はクレオルのレコードを山ほど持っている。クレオルの歌の。それに私の孫娘はさらにたくさん持ってくるんだよ。彼女は息子が歌手だったことを知らないんだ。でもそれはクレオルの歌じゃない。息子はクレオルの歌をうたわなかった。彼は長男で最近亡くなったよ。一か月半前にね。友人と家族が聴くようにってアルバムをたくさん持ってきてくれた。彼の歌は私には…。それから彼の仲間が私にまたたくさん彼の歌を持ってきてくれた。彼はレユニオンでは歌わなかった。こっちに帰省した時は歌ったけどね。彼は本土で、フランスの北の方でお年寄りのために歌っていた。それに彼を待っている女の子たちがいたんだよ。私の息子はちょっとばかり放蕩者だった。その後ろにある写真が彼で、孫たちと一緒に写っている。彼には5人の孫がいる。私は14人いる。曾孫が14人。10人の孫と14人の曾孫だよ。あんたが会ったのが一番年上の曾孫娘で、彼女は「高校ではみんなが私のことをじろじろ見る」と言っている。一番年上の曾孫息子は彼女より少し小さいのだけれど、私にこう言ったよ：「おばあちゃん、僕はマリー [曾孫娘] と全然おしゃべりできない。高校で上級生たちみんなが僕たちのことをじろじろ見るので」。それで私は彼に言ったんだ：「あんたは従姉にいつも会ってるでしょう！」。彼女は今年バック [バカロレア、大学入学資格試験] に受かったし、他の孫息子も獣医になるための修了証をもらった。彼は天気の良い時に飼い犬を失ってひどく泣いたよ。とても可哀想だった。飼い犬が死んだのだからね、わかるだろう。

—— あなたはいつまで教えていたのですか。

いつまでって、私は45歳まで教えてもうすぐ95歳だから、あんたが計算してくれるかい。私が計算するとなると鉛筆が必要だし。私は子供たちよりも引退するのが早かったよ。20歳の時に働き始めたけれど、その当時は保険料を47年間納めなければならなかった。45歳でやめたから25年間働いたことになる。私の夫は60歳で引退して65歳で亡くなった。子供の数に比例して割引制度があったのでそれで得をしたよ。子供ひとりについて3年分だった。私は子供が3人いたからそれで就労年数を割り引けたということになる。私は働いて、働いて、今は年金暮らしさ。夫の年金も半分あるし。引退した後に旅行にも行ったけど、夫は自分の引退まで旅行するのを控えていた。ところが孫娘がやってきた。彼女は自分の夫に先立たれてしまって、しかも子供を4人抱えてうちに厄介になりに来たので大変だったよ。旅行なんてとんでもなかった。それが理由で夫は苦勞した挙句翌年に亡くなった。

—— ところで、昔の話もそうですけれど、物語とか言い伝えとかいうものについてもお話を聞ければと思っているのですが。

レユニオンについて私はすみずみまで知っているよ。物語だってよく聞かされた。何しろ私は教師一家に育ったからね。2人のおじと2人のおばが教師だったし、私のパパも教師だったから。サイクロンが来た時には、あんたも知っているだろう、家は木でできていたからサイクロンが全部壊した。今でも覚えているけれど、祖母の家は頑丈だったから少なくとも20人はいたよ。友人や近所のひとがみんなやってきた。私はその頃14か15だった。彼らはうちまでやってきたよ。サイクロンが来た時に、頑丈な家を持っている人が近所の人を迎え入れたんだ。今でもそういうことをしているかどうか私は知らないけどね。

—— それで昔のお話についてですが、「カル婆さん」などはあなたの時代にありましたか？

私の家族ではむしろ...「カル婆さん」もそうだけど私は知らない。昔の歌はあったよ。昔の古い歌だよ。その頃の人たちについてのね。

—— あなたが言っているその歌というのは、どういう歌だったんですか？

むしろ民謡というようなものだね。昔の民謡。ちょっと待って、思い出してみる。[歌]...好きな人がいたら、『私のドゥードゥー』と呼んでいた。それは舞踏会なんかに行く時で、昔のクレオル語だった。それで思い出がよみがえってきて若い頃を思い出すわ。みんなよく踊った。女も男も。それから、誰かが私に持ってきてくれたわ、それを。クレオルは野菜のシュシュをたくさん食べていた。シュシュって知っているかい？ まさにロマンスだよ。「ドゥードゥー」というのは好きな人のこと。男でも女でもね。

—— そういう言葉で他のものがありますか？ 昔の言葉でもう聞かれなくなったものとか？

あのね、私は教師の家庭で育ったから、きれいなフランス語を使っていたわ。

—— 実際には中学校や小学校に通っている生徒たちは、友達の間とか授業ではフランス語を話していましたか？

いいえ、彼らはクレオールを話していた。私はクラスではフランス語を話すようになって注意していたのだけれど、彼らはクレオールを話していた。それを聞いたらレユニオンのことを話しているとわかったでしょうね。レユニオンの景色のことを話してばかり。あんたでもわかるよ。

—— 今では様変わりしましたか？ それとも...

あのね、島から外に出た孫娘に会うと、彼女はちょっとした内緒話をしてくれるんだよ。彼女のパパが言うには「どうしてお前はおばあさんには内緒話をするのに、我々には話さないんだ」ってね。今じゃもう終わっているよ。その頃は毎週日曜日にはミサに行っていた。クリスマスには深夜ミサもあったけど、今もあるかどうか私は知らない。クリスマスのミサ、そう深夜ミサだったよ。そこに行けば聴けたんだよ。